「ないなら自分たちでやるしかない」
ケロウナ日本語学校＋日本文化継承プログラム

継続支える母親たちの切なる思いとチームワーク

「いーち、にー、さーん、しー……じゅういち！　やったー！」。遅い春がやってきた公園で大縄跳びをする子どもたち。日本語で遊ぶ我が子たちを見守る母親たちも嬉しそうだ。

BC 州ケロウナ市 に「ケロウナ日本文化継承コミュニティ」がある。「子どもたちが日本語を使える機会をたくさん作ってあげたい」。情熱あふれる女性たちが、子ども会、乳幼児の集まり、日本語学校、太鼓の会、阿波おどりの会を次々と立ち上げ、この秋に開始から 10 周年を迎える。子育ての忙しさの中、どうやって継続発展を続けられたのだろうか。

誰もが参加しやすい子ども会の形式でスタート

幼児を抱える吉澤明子さんと堀江博美さんが「日本語で遊ばせたいね」と意気投合。場所を借りて「ケロウナ子ども会」を始めたのは 2012 年 10 月のことだ。会の前半を幼児はひらがな練習、小学生は早口言葉などで楽しく日本語に触れる時間とし、後半は主に季節の遊びの時間とした。会場はある時期まで参加メンバー所有のワイナリーの敷地を使わせてもらった。

2014 年には「乳幼児の母親の交流の機会も」と「おうたとおはなしの会」を開始。家にこもりがちな乳幼児の母親が子どもを遊ばせ、日本語でおしゃべりできる機会を提供してきた。この会の運営に精力的に取り組む羽吹万里さんには、かつて自分がケロウナ で暮らし始めたばかりの心もとない時期に手を差し伸べてくれた人がいたという。その恩恵を世代から世代へと順送りできたらという思いがへ向ける原動力になっている。

太鼓や阿波おどりの活動で日本文化を体感できる機会を

日本語クラスを小さく開始

「家庭で長女に日本語を教えていましたが親子だと喧嘩になるし、続かない。みんなでやることで続けて、深められたら」という明子さんの強い思いが核になり、2016 年、日本語指導経験者のウィルソン希美子さんを講習に迎えて念願の日本語クラスを開始。「小さく始めよう」と、初年度は小学 1 年生クラスのみ開講。翌年は 2 年生と 1 年生、その翌年は 3、 2、 1 年生とクラスを増やした。

生徒には「日本語でのコミュニケーションの面白さを肌で感じてほしい」と希美子さん。基礎となる表現力養成のため、高学年の授業では毎週生徒が物語を創作。作品を講師が朗読し、生徒同士が「その週の 1 番」を決める取り組みでクラスに歓声が上がっている。昨年非営利法人の登録を果たした「ケロウナ日本語学校」。現在講師は 5 人、全校生徒は 25 人だ。

親子が力を合わせて地域のイベントで日本文化を披露

「日本語環境で日本文化にも触れ、そこでうれしい体験があれば子どもたちの学習意欲も自信も高まるはず」（伊藤久美恵さん）。そうした思いから地域イベント「アジアン・ヘリテージ・マンス」のステージに浴衣での歌や踊りで例年参加している。2014 年には運営に夫たちも巻き込み、大下り彖さんが中心となって和楽器奏者を招いての大掛かりなステージを実現した。コロナ禍の昨年もオンライン企画に参加。各自が自宅でビデオ撮影した陽気なパ

親子が一緒にステージを作った 2014 年のアジアン・ヘリテージ・マンス

屋外で大縄跳びをのびのびと（子ども会）

フォーマンスを編集してアップした。

また太鼓奏者・中村尚子さんの指導による子ども対象の太鼓サークル「どどん」も貴重な日本文化体験の機会だ。さらに2019年には年齢を問わず楽しめる阿波おどりの会「水龍連」を結成。代表の関口純子さんは「（子どもたちが青年期へと進む中で）日系人ということで周りの友人たちとシェアできない悩みもあると思う。そんな時に仲間がいると強いと思うんです。そして勉強以外でも日本文化に触れる機会を作りたい」と会に託した思いを語る。純子さんの娘が祖父母の住む徳島で観て強烈に惹かれたという阿波おどり。ここから本場徳島の阿波おどりグループとの交流も生まれている。

「楽しく学ぶ」を大事にするケロウナ 日本語学校。授業で習った漢字を使って行うビンゴが生徒たちに好評だ。

力を合わせて、できる人ができることを

活動場所の確保や経費の問題、コロナなど、困難はつねに存在する。継続の秘訣を、今日まで日本語継承コミュニティをリードしてきた明子さんと運営メンバーへ個々に尋ねると「何かあっても、継承語コミュニティとして、今、子どもたちにとって一番いい選択するという基本に立ち返る」「まずは健康、家族優先。コミュニティ活動はできる範囲で、細く長く楽しくやろうと声を掛け合う」といった言葉が皆から同じように返ってきた。皆の共通の願いーー「成長して悩みを持ち始める子どもとも日本語で話せるように」「実家の親たちが孫とコミュニケーションを持てるように」「日本人のアイデンティで悩んだ時に仲間がいてくれるように」――そうした願いの実現のために、互いの強みを活かして主体的に行動を続けてきた女性たち。時には言いにくいことも言わないと動けない。だからこそ育った信頼関係があり、それが大きな宝のひとつだ。「将来は日系のシニアクラブになっていますね」と、息の長い活動になることを見越して明子さんが微笑んだ。

おうたとおはなしの会でのひとコマ

今年３月には日本語学校の小学部から初めて卒業生を送り出し、中学部も新設。卒業のあいさつには親たちへのこうした言葉があった。「宿題を手伝ってくれてありがとう」「続けるモチベーションをありがとう」。丁寧に耕した環境の中で言葉が育ち、人が育っている。

（取材　平野香利）